

いのちの電話相談員の死に対する態度と 自尊感情に関する研究

杉 本 典 子

1. 問題と目的

1-1 問題の背景

今日、数多くのボランティア活動が存在している。ボランティアの参加は、本人の自由意志によるものである。

田村は、ボランティアに参加するのは、他人に対する憐憫の情ばかりでなく、いつかは他人事ではない可能性や、あるいは自分のアイデンティティを確立するためと考える人も多いが、それらの根底には、住民どうしの、さらには人類全体の連帯意識と緊急性の意識とがあると述べている（田村,2009）。

Eva は、多くのボランティア活動は、「各人の活動力、技能、及び才能による、意義ある貢献を示しているのみでなく、それはまた、ボランティア自身の心理的健康、及び自己実現に対しても大いに役立っているのである。ボランティアとなることは、民主的なパーソナリティの発達に必要な多くの経験を与えてくれる」と述べている（Eva,1971）。

いのちの電話は、援助を主体としたボランティアのひとつである。1953年英国教会牧師 Chad varah が開始したもので、わが国では1971年に東京で開局されて以来40年近くが経過している。林によれば、ボランティア電話相談員による be-friending のスタンスに立つ自殺防止電話相談活動として、全国50センター（52ヶ所）の地域で展開してきており、その存在の認知と趣旨や活動に対しては、一定の社会的評価を受けるまでに至っているとしている（林,2009）。長谷川も、真の意味でのコミュニティが喪失しているといわれる現代社会の中で、それゆえにいつそう心の健康を害する人々が増加していくのであるが、いのちの電話は市民によるコミュニティ意識作りの役割を果たし、そしてメンタルヘルスの予防活動の一端を担っている（長谷川,1990）と述べており、今やいのちの電話は社会資源のひとつとして定着してきていると考えられる。

1-2 問題と目的

一人の人間の生死に関わる相談は、非常に重くて深い。電話を受けた相談員は、かけ手に対して、相談員自身の心の深い部分でのみ、関わるができる。

Gene は、危機と電話相談員について次のように述べている。電話相談員がさまざまな問題状況にある人々とかかわりを持つのは感情的にたいへん困難でかつ重荷となるものである。意味、目的、実存、死と死にゆくこと、こういった通常の交際ではほとんど触れないことが、通話者との関係で重大な要素となる。相談員はこれらの点に関して、自分の態度を問いただしておくことが大切である。そして危機にある人と取り組むためには、感情が非常に安定していることが必要である。電話相談員は平静を保ち明晰な思考とバランス感覚を持っていなければならず、自分が通話者の生活内にある数少ない安定要因のひとつになっていることを認識しておかねばならない。すなわち、電話相談員が危機サービスをするには、自己が安定している必要があり、かかわりの中で自己を見失わないために真の成熟が必要である、と述べている (Gene, 1973)。

筆者も Gene が言うように、この援助活動に携わる以上、死の問題は、必ず自分自身に問いただしておかねばならないもののひとつであると考え。そして大切であるとされる自己の安定に関しても、相談員が自分をこれでいいと自己受容でき安定していることで、混乱し動揺している状態の相談者に、落ち着いて寄り添うことができると考える。

電話相談員は、ボランティアではあるが、看護師や教員などの対人援助職に近いと思われる。そこで彼らと比べると、相談員のバーンアウト度は低いという調査結果 (平井, 2008) もあるのだが、それでも加藤は「多くのセンターで、養成研修に入ってくる人たちと同数の相談員が辞めていく現状がある」と指摘している (加藤, 2009)。そこで、相談員が活動を継続することにより、さらによりよい援助を提供できるようになるのであれば、援助される側にとっても、相談員の継続は意義のあることだと考えられる。

これまでに援助される側の研究は、特に実践において研究されてきている。また、ボランティア活動を取り上げ、その動機や継続に関しての研究もされてきている。しかし、援助する側である電話相談ボランティアに焦点を当て、その心理、認識を研究したものは、まだ十分とはいえない。

以上より本研究は、常に死と向き合わねばならない相談員側に視点を向け、相談員は自分の死をどのように認識し、どのように自己を感じているのかを調査する。つまり、いのちの電話で活動している相談員自身の死に対する態度と、自分をこれでよいと考える程度の自尊感情から、相談員の心理的側面の実態を把握し、それが年齢・性・継続年数をはじめとしたいくつかの要因とどのような関連を持っているのかについて検討することを目的とする。

1-3 先行研究の概観

死に対する態度の研究は、老年期は、河合ら（1996）による平均年齢73.1歳の315人を対象に、死の態度に関連する諸要因を明らかにしたものや、針金ら（2009）による平均年齢66.9歳の1546人を対象に分析したものがある。

河合らは、同尺度を用い、わが国の高齢者は死の不安や恐怖が高く、死後の世界を肯定的に評価すること（積極的受容）よりも、現世からの回避により死を受け入れる（回避的受容）傾向が強く認められたとしている。また、死の不安や恐怖と関連する要因は、年齢、経済状態、配偶者の有無、子ども数であり、死の受容に関連する要因は、年齢、学歴、健康状態、経済状態、信仰、配偶者や孫などの有無、死別体験などであったと報告している（河合ら,1996）。

針金らは、同尺度の短縮版を作成するにあたっての調査の際の分析で、年代が高いと回避的受容が高く、現在配偶者がいると回避的受容が低く、主観的健康感が低いと回避的受容が高い点は、河合らの研究と一致し、死別経験の有無が積極的受容に影響せず、配偶者の有無が死の恐怖の高さに影響する点が一致しなかったと報告している（針金ら,2009）。

青年期では、倉田が大学生（平均20.6歳）221名を対象に死に対する態度と関連因子の検討をした結果、死に対し興味関心を持ち、深く考えた経験のあるものは、死別経験を有せずとも、死を客観的に認識し、死を必然的に受容する態度である中立的受容が高かったことを明らかにした（倉田,2008）。看護学科の短期大学生281名（平均19.8歳）を対象に学年別の比較をした砂賀らは、新入生は中立的受容が有意に低く、卒業生は回避的受容が有意に高かったことを報告している（砂賀ら,2005）。

その他、大学生や看護学生を対象にした研究は数多く行われているが、中高年を対象にした死に対する態度の研究は、鹿村ら（2007）が同尺度を用い、看護系短期大学学生保護者114名を調査した研究があるものの、他に多くあるとはいえず、中高年中心のひとつの組織団体に対する調査はさらに数が限られる。

自尊感情についての研究および自尊感情をひとつの変数として用いた研究は実に多く、James（1892）以来、現在に至るまで莫大な研究が積み重ねられてきている。こうした研究で頻繁に用いられるのが、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度である。

鈴木らは Rosenberg の自尊感情尺度を用い、444名の教員養成系の大学生を調べ、性差は無く、学年別では高学年ほど高くなることを示し、自尊感情は学年の上昇すなわち年齢的な要素によって向上する傾向にあったとしている（鈴木ら,2006）。

菅らは、臨床心理士を目指す大学院生177名（平均26.1歳）の調査を行い、性差・学年差はみられなかったことを報告している。性差が見られなかったのは、大学院生は性差が見られた大学生に比べ年齢が高いことと、女性であることがハンディキャップにならない専門職を目指し

職業的アイデンティティを確立しつつある群であるという二つの可能性をあげている。学年差については、臨床実習体験などの影響を受けても自尊感情は容易に変動しないものであると考えられるとしている（菅ら,2007）。

松岡によると、15歳から86歳までの男女865名の調査において、理想自己の生涯発達を調べ、その中で自尊感情は、高校生・大学生群が他の群よりも有意に低く、その他の群間には有意差はなかった（高校<大学<23歳～34歳・35歳～44歳・45歳～54歳・55歳～64歳・65歳～86歳、 $p<.05$ ）ことを報告し、加齢は何らかの喪失を伴う過程であるが、従来の生涯発達研究で示されているように、自尊感情は生涯にわたって維持されることが支持されたとしている（松岡,2006）。

若本らは中年期男女1006名を対象に発達の特徴を調べ、その中で、中年期を前期（40歳代）と後期（50歳～65歳）に分け、中年後期は高自尊感情という特徴があることを示した（若本ら,2004）。

経験年数との関連についての研究に、福田らが、2712名の看護師を対象に自尊感情の分析をしたものがある。福田らによると、病院勤務年数10年以上の者は、10年以下の者と比べ、自尊感情が有意に高く、それは10年位を目安に自尊感情が日常業務のなかで培われてきているものであると考察している。さらに、経験年数が増すと自尊感情が高くなる傾向について、自尊感情の高い者が長く就業しているためと思われる述べ、また、年を経るに従い自己に対する尊重や価値を評定する程度が、より高くなっているとも考えられると述べている（福田ら,2001）。

1-4 先行研究の問題点と本研究の位置づけ

以上の通り、死に対する態度と自尊感情の研究はこれまでに多くされてきた。しかし、どちらも一貫した研究結果はまだ報告されていない。また、中高年という対象での研究は少なく、さらに、相談員を研究したものはあまり見当たらない。ボランティアの対人援助としては介護関係の研究が多くあり、対人援助職では教師・看護師などを対象とした研究があるが、いずれもボランティアの相談員とまったく同質のものとは言いきれず、当てはめて論じることはできない。

板橋は14年前にいのちの電話の相談員を対象に死生観の研究をしている。そこでは、現代人の死に対する一般的な傾向および心理的状況の把握のために、相談員を一般人の代表と捉えて研究している（板橋,1997）。電話相談員の性質を把握し、継続年数などによる相談員の意識や認識の違いを検討したものではない。

以上のことから、本研究はいのちの電話のボランティア相談員の実態を把握し、相談員自身の死に対する態度と、個人の生き方に大きな影響を与えるとされる自尊感情について、年齢、

性、継続年数などとの関連を調べ、検討する。このことは、いのちの電話が意味ある活動としてさらに発展していくための要因を検討することにつながり、ひいては、対人援助の研究の一助となるものとする。

2. 方法

2-1 調査対象者

認定されたAいのちの電話の相談員を対象とする。配布293部に対し、回収数は119部である。有効回答者数は109名（平均57.3歳，SD=10.4）で、回収率37.2%である。男性18名（平均55.1歳，SD=12.2）、女性91名（平均57.7歳，SD=10.0）であった。（表1）

表1 対象者の概要 n=109			
項目	カテゴリー	人数	%
継続年数	1年未満	14	12.8
	1年以上5年未満	37	33.9
	5年以上10年未満	20	18.3
	10年以上	38	34.9
年齢	49歳以下	19	17.4
	50歳～59歳	36	33.0
	60歳～69歳	45	41.3
	70歳以上	9	8.3
性別	男性	18	16.5
	女性	91	83.5
配偶者	あり	73	67.0
	なし	36	33.0
職業	主婦（主夫）	36	33.0
	会社員（自営含む）	21	19.3
	パート（アルバイト）	21	19.3
	公務員	8	7.3
	その他	23	21.1
フリーダイヤル参加経験	あり	47	43.1
	なし	62	56.9
活動を辞めようと思ったこと	あり	40	36.7
	なし	69	63.3

2-2 調査期間および調査実施の手続き

2009年6月初旬に、質問紙を施設内の個人レターボックスに配布した。2009年7月末日に締切日を設定し、事務局内に設置した回収ボックスへの投函による回収を主とした。一部、郵送

にもよった。

2-3 手続き

1) フェイスシート：継続年数、性別、年齢、婚姻、職業、フリーダイヤル参加の有無、相談活動を辞めようと思ったことの有無などを尋ねた。

2) 死に対する態度尺度：死に対する態度尺度 (Death Attitude Profile: DAP) は、21項目からなる質問紙で、Gesser ら (1987) が開発し、河合・下仲・中里 (1996) が邦訳したものを用いた。この尺度は、人が死に対して持っている態度を多次的に評価するもので、「死の恐怖」「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の4つの下位尺度から構成されている。

「そう思う」(5点) から「そう思わない」(1点) までの5段階のうち、一つを選ぶ5件法である。回答をそのまま得点化し、各領域の合計得点を求めた。

3) 自尊感情尺度：Rosenberg (1965) が作成した自尊感情尺度を用いた。本尺度は自尊感情の測定に最も広く用いられている尺度であり、質問項目数が10項目と少なく被験者の負担も少ない。訳語は複数存在しており、wording についての検討も行われている。本論においては、山本・松井・山成 (1982) による邦訳版を採用した。Rosenberg は、自分を「これでよい (good enough)」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えている。

各項目について「当てはまる」(5点)、「やや当てはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「やや当てはまらない」(2点)、「当てはまらない」(1点) の5段階から一つを選ぶ5件法で、回答の選択肢を得点化し (逆転項目は5点→1点、4点→2点に換算)、合計得点を求めた。したがって得点は10点から50点の間で分布する。

2-4 分析方法

データの情報処理及び分析は、統計解析ソフト SPSS の PASW Statistics 17.0 を使用した。基本集計を行った後に、継続年数をはじめとする対象者の属性と死に対する態度の関係および、自尊感情との関係を分析した。統計的手法として、2項目間はt検定、3項目間以上は一元配置の分散分析・多重比較を用いて行った。

3. 結果

3-1 死に対する態度

各下位次元得点の平均値は、「死の恐怖」19.1 (SD=5.56)、「積極的受容」10.3 (SD=

3.62)、「中立的受容」13.3 (SD=3.28)、「回避的受容」11.9 (SD=3.60) であった。

継続年数による死に対する態度得点の比較では、「中立的受容」で有意差が認められた ($F(3,105)=2.71, p<.05$)。その後の検定で多重比較の結果、1年未満の者が1～5年の者 ($p<.05$)、10年以上の者 ($p<.05$) より低かった。

「死の恐怖」「積極的受容」「回避的受容」は、継続年数による差は認められなかった。年齢別では「回避的受容」で、有意差が認められ ($F(3,105)=2.85, p<.05$)、多重比較の結果、49歳以下は50代より有意 ($p<.05$) に高く、また、60代も50代より有意 ($p<.01$) に高かった。(表2)

表2 各独立変数における群別の下位次元得点平均

	死の恐怖	有意差	積極的受容	有意差	中立的受容	有意差	回避的受容	有意差
継続年数								
1年未満	21.5 (5.32)		10.1 (3.83)		11.4 (2.53)		11.4 (4.52)	
1年以上5年未満	19.1 (5.68)		9.9 (3.52)		13.9 (3.56)		11.5 (3.23)	
5年以上10年未満	19.1 (5.63)	n.s.	10.4 (4.31)	n.s.	12.5 (3.09)	*	12.1 (3.49)	n.s.
10年以上	18.4 (5.47)		10.6 (3.37)		13.7 (3.11)		12.4 (3.72)	
年齢								
49歳以下	20.2 (5.79)		10.8 (3.27)		12.8 (3.49)		12.8 (4.02)	
50歳～59歳	18.2 (5.62)		10.2 (4.43)		12.7 (3.68)		10.6 (2.88)	
60歳～69歳	20.0 (5.29)	n.s.	9.9 (3.07)	n.s.	13.7 (2.80)	n.s.	12.7 (3.84)	*
70歳以上	16.2 (5.52)		10.9 (3.69)		14.2 (3.27)		11.3 (2.87)	
性別								
男性	19.8 (4.39)		9.8 (3.47)		13.7 (2.80)		12.2 (3.24)	
女性	19.0 (5.78)	n.s.	10.3 (3.67)	n.s.	13.2 (3.37)	n.s.	11.9 (3.69)	n.s.
配偶者								
あり	19.2 (5.80)		10.1 (3.43)		13.6 (3.39)		11.7 (3.81)	
なし	19.0 (5.12)	n.s.	10.6 (4.02)	n.s.	12.6 (2.99)	n.s.	12.3 (3.16)	n.s.
フリーダイヤル参加								
あり	18.4 (5.13)		10.4 (3.73)		13.3 (3.29)		11.7 (3.74)	
なし	19.7 (5.84)	n.s.	10.1 (3.56)	n.s.	13.2 (3.29)	n.s.	12.0 (3.53)	n.s.
辞めようかと思った事								
あり	18.8 (6.08)		10.9 (3.85)		13.1 (3.76)		12.8 (3.79)	
なし	19.3 (5.28)	n.s.	9.9 (3.46)	n.s.	13.3 (2.99)	n.s.	11.4 (3.43)	†

()内はSD

† $p<.10$, * $p<.05$

年齢別の「回避的受容」の各項目においては、有意差の認められたのは、「5. 死は私の人生の重荷からの救済だと思う」 ($F(3,105)=2.89, p<.05$) と、「10. 私は生きることにうんざりしている」 ($F(3,105)=2.86, p<.05$) の2項目であった。「5. 死は私の人生の重荷からの救済だと思う」は、50代が49歳以下 ($p<.05$) および60代 ($p<.05$) よりも有意に低かった。「10. 私は生きることにうんざりしている」では、49歳以下が50代 ($p<.05$) および70歳以上 ($p<.05$) よりも有意に高かった。(表3)

表3 年齢別回避的受容の各項目得点平均

	49歳以下	50～59歳	60～69歳	70歳以上	F値
項目5	2.4 (1.30)	1.6 (0.83)	2.2 (1.10)	1.9 (0.60)	2.889*
項目7	1.6 (0.84)	1.5 (0.77)	1.7 (0.86)	1.7 (0.71)	
項目10	1.8 (1.12)	1.4 (0.68)	1.7 (0.79)	1.1 (0.33)	2.856*
項目12	2.6 (1.12)	2.3 (1.06)	2.8 (1.03)	2.9 (1.05)	
項目14	2.6 (1.07)	2.2 (1.06)	2.4 (1.12)	2.3 (0.87)	
項目16	1.8 (1.03)	1.7 (1.04)	1.9 (0.98)	1.4 (0.53)	

()内はSD

* $p < .05$

性別・配偶者の有無・フリーダイヤル参加の有無では、有意な差を認めなかった。

辞めようと思ったことの有無別では、「回避的受容」において、有意な傾向があるにとどまっていたが ($P = .06$)、「回避的受容」の各項目を見ると項目7「死は私にとって別にどうでもいいことだ」において辞めようと思ったことの有る群のほうが有意 ($P < .05$) に高かった。(表4)

表4 辞めようと思ったことの有無別の回避的受容の各項目得点平均

	辞めようと思ったこと有	辞めようと思ったこと無	t値
項目5	2.2 (1.07)	1.9 (1.04)	2.082*
項目7	1.8 (0.90)	1.5 (0.74)	
項目10	1.7 (0.96)	1.5 (0.72)	
項目12	2.8 (1.06)	2.5 (1.07)	
項目14	2.4 (1.03)	2.4 (1.10)	
項目16	1.9 (1.04)	1.7 (0.94)	

()内はSD

* $P < .05$

3-2 自尊感情

自尊感情得点は、全体では15～49点に分布し、平均値は38.0 (SD=6.6) であった。継続年数による自尊感情得点については有意差がみられなかった。自尊感情の各項目別では、項目8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」で有意差が認められた ($F(3,105) = 3.06$, $P < .05$)。その後の検定で多重比較の結果、1年～5年の者は1年未満の者 ($P < .05$) および5年～10年の者 ($P < .05$) より有意に低い得点であった。(表5)

表5 継続年数別自尊感情得点平均

項目事項	$\alpha = .83$	1年未満	1～5年未満	5～10年未満	10年以上	F値
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である		4.2 (1.25)	4.3 (.78)	4.5 (.76)	4.0 (.92)	
2. いろいろな良い素質を持っている		3.9 (1.17)	4.1 (.74)	4.2 (.95)	3.8 (.91)	
3. 敗北者だと言うことがよくある (*)		3.6 (1.40)	4.0 (1.10)	4.1 (1.12)	4.0 (1.19)	
4. 物事を人並みには、うまくやれる		3.6 (1.02)	3.8 (.86)	4.0 (1.12)	3.4 (1.00)	
5. 自分には、自慢できるところがない (*)		3.4 (1.60)	3.3 (.90)	3.7 (.92)	3.3 (1.18)	
6. 自分に対して肯定的である		3.9 (1.35)	3.8 (.93)	4.3 (.73)	3.8 (.91)	
7. だいたいにおいて、自分に満足している		3.6 (1.39)	3.7 (.93)	4.1 (.85)	3.7 (.90)	
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい (*)		3.6 (1.45)	2.6 (1.14)	3.3 (1.13)	3.0 (1.15)	3.063*
9. 自分はまったくだめな人間だと言うことがある (*)		3.5 (1.61)	3.8 (1.27)	4.3 (.97)	3.8 (1.22)	
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと言う (*)		4.4 (.76)	4.3 (1.00)	4.6 (.61)	4.1 (1.10)	
自尊感情		37.6 (8.90)	37.6 (5.52)	41.0 (5.33)	36.9 (7.09)	

()内はSD, (*)は逆転項目 * $p < .05$

年齢別、性別、配偶者の有無別、フリーダイヤル経験の有無別においては、有意差は見られなかった。

辞めようと思ったことの有無別で、自尊感情得点は、無い群において有意に高かった ($t(107)=3.01, p < .01$)。自尊感情の各項目別では、項目1 ($p < .05$)、項目3 ($p < .05$)、項目4 ($p < .01$)、項目7 ($p < .05$)、項目9 ($p < .01$)、項目10 ($p < .01$)において、無い群の方が有意に高い得点であった。(表6)

表6 辞めようと思ったことの有無別自尊感情得点平均

項目事項	思ったこと有	思ったこと無	t値
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	4.0 (0.90)	4.4 (0.86)	2.452*
2. いろいろな良い素質を持っている	3.9 (0.88)	4.0 (0.92)	
3. 敗北者だと言うことがよくある (*)	3.6 (1.19)	4.1 (1.12)	2.396*
4. 物事を人並みには、うまくやれる	3.3 (0.94)	3.9 (0.97)	2.905**
5. 自分には、自慢できるところがない (*)	3.2 (1.04)	3.5 (1.15)	
6. 自分に対して肯定的である	3.7 (1.02)	4.0 (0.91)	1.720†
7. だいたいにおいて、自分に満足している	3.5 (1.09)	3.9 (0.87)	2.196*
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい (*)	3.1 (1.17)	3.0 (1.25)	
9. 自分はまったくだめな人間だと言うことがある (*)	3.4 (1.19)	4.1 (1.22)	2.853**
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと言う (*)	4.0 (1.06)	4.5 (0.82)	3.072**
自尊感情	35.6 (7.03)	39.4 (6.01)	3.009**

()内はSD, (*)は逆転項目 † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

3-3 死に対する態度と自尊感情の関連

自尊感情得点を平均値 (38.0) を基準に2群に分け、37点以下を低群、38点以上を高群とし、死に対する態度との関連を検討した結果、「死の恐怖」においては有意傾向がある ($t(107)=1.75, p < .10$) にとどまっていたが、「回避的受容」において有意差が認められ ($t(107)=3.33, p < .01$)、自尊感情低群の得点の方が高かった。(表7)

表7 自尊感情群別の死に対する態度下位次元得点平均

	死の恐怖	有意差	積極的受容	有意差	中立的受容	有意差	回避的受容	有意差
自尊感情								
低群	20.2 (5.91)		10.1 (3.29)		13.3 (3.47)		13.2 (3.91)	
高群	18.3 (5.17)	†	10.4 (3.89)	n.s.	13.2 (3.15)	n.s.	10.9 (3.04)	**
()内はSD							†p<.10, **p<.01	

「回避的受容」の各項目（5・7・10・12・14・16）と自尊感情の群別においては、6項目中4項目、「7.死は私にとって別にどうでもいいことだ」（ $t(107)=2.98, p<.01$ ）、「10.私は生きることについてうんざりしている」（ $t(107)=3.07, p<.01$ ）、「14.私の人生を延ばすことにどんな目的も意味もみつからない」（ $t(107)=2.09, p<.05$ ）、「16.この世に期待するものは何もないと思う」（ $t(107)=2.51, p<.05$ ）において、自尊感情低群のほうが有意に高かった。

（表8）

表8 自尊感情群別回避的受容の各項目の得点平均

	自尊感情低群	自尊感情高群	t 値
項目5	2.2 (1.07)	1.9 (1.02)	1.684†
項目7	1.9 (0.89)	1.4 (0.69)	2.980**
項目10	1.8 (0.95)	1.3 (0.63)	3.068**
項目12	2.6 (0.94)	2.6 (1.16)	
項目14	2.6 (1.07)	2.2 (1.04)	2.087*
項目16	2.0 (1.17)	1.6 (0.74)	2.505*

()内はSD†p<.10, *p<.05, **p<.01

さらに死に対する態度と自尊感情間の相関係数（ピアソンの積率相関係数）を出すと、死の恐怖と自尊感情（ $r=-.22, p<.05$ ）、回避的受容と自尊感情（ $r=-.36, p<.001$ ）において、有意な相関関係がみられた。（表9）

表9 自尊感情と死に対する態度の積率相関係数

	死の恐怖	積極的受容	中立的受容	回避的受容
自尊感情	-.22 *	.05	-.04	-.36 ***
*p<.05, ***p<.001				

4. 考 察

4-1 死に対する態度について

1) 相談員の死に対する態度

鹿村らは、一般の中高年齢者（50歳未満59名、50歳以上55名、計114名）において死に対する態度

の調査をしている（鹿村ら,2007）。本調査と比較すると、死の否定的側面を測定する「死の恐怖」は、一般の中高年者は22.6（SD=6.02）で、いのちの電話相談員より高く、客観的に死を受け入れる「中立的受容」は10.0（SD=2.10）で、いのちの電話相談員より低い得点であった。「積極的受容」と「回避的受容」は、一般の中高年者の得点は、それぞれ10.2（SD=3.18）、11.8（SD=3.83）で、相談員とほぼ同様の結果であった。

金児は、死を知れば知るほど、死をみつめればみつめるほど、死にまつわる迷信や迷妄が払拭され、死の恐怖が少なくなっていくことは十分に考えられると述べている（金児,1991）。丹下も、死の恐怖は死について考える頻度が頻繁になるにつれ減少するという報告をしている（丹下,1995）。そして、森末は、一般成人は62.5%の者が死についてほとんどあるいは稀にしか考えていないことを明らかにしている（森末,2003）。それに比べて相談員は、相談活動で死と向き合い死を考える機会は明らかに多い。このことより、死をみつめる相談員は、一般の中高年より死の恐怖の程度が少なくなっているのではないかと考えられる。

また、倉田は、死に対し関心を持ち、深く死について考えた経験がある者が、高い「中立的受容」を示し、死について考える経験の有無が、「死に対する態度」を形作るひとつの決定因であると述べている（倉田,2008）。相談活動は、精神的、身体的苦痛や不安、そして死を、相談者を媒介として直視することで、第三者に生じた経験でありながら、相談員自身の生死について考えを深めるきっかけとなり、高い中立的受容を示したのではないかと推察される。

2) 死に対する態度と継続年数

「中立的受容」において、相談活動を開始して1年未満のものは、1年以上5年未満の者との間と、10年以上の者との間に差が見られた。

それは、加藤が「相談員としては新人の時代が最も傷つきやすく疲弊しやすい」と述べている（加藤,2009）ことと関連があると思われる。彼が「自分の意欲や周囲の期待とは裏腹に、未熟な援助技術ではかけ手への支援がうまくいかず、失敗感を味わうことも多くなる。また、かけ手との関係においては、投影や転移・逆転移などの問題が生じ、支援する相談員が人間関係の力動に翻弄されるだろう」とも指摘している（加藤,2009）ように、1年未満の者はまだ未熟であるゆえ、相談者に巻き込まれやすく、自分自身を客観視しにくいものと考えられる。

しかし、1年未満の者と、5年以上10年未満の者との間には、有意な差がみられなかった。つまり、継続年数が増えるにつれて、徐々に相談員は客観的に死を受け入れるようになっていくわけではなく、継続中のある時期、再び客観視できなくなる時期を経て、10年以降には死の必然性を受け入れていくというプロセスをたどることが示唆された。10年以降というのは、組織内において、研修グループリーダーや、継続電話担当などの役を担う時期と重なっている。

3) 死に対する態度と年齢

年齢による比較では、「回避的受容」で49歳以下と60代が50代より有意に高かった。

49歳以下の群は本研究では最も年齢の低い群であるが、回避的受容の項目から、「死は私の人生の重荷からの救済だと思う」くらいに、「生きることについてうんざりしている」としたものが多かった。

河合らは、回避的受容は主観的健康感と関連しており、主観的健康感が低いと、死を恐れるより死によって身体的不快感から開放されることを望むとしている（河合ら,1996）。針金らは、その主観的健康感に加え、回避的受容は精神的に健康でないほど高いことを明らかにしている（針金ら,2009）。

岡本は、中年期危機面接を行い、40代の者が体験した自己に対する否定的変化や否定的自己意識は、30代まではほとんど体験されず、中年期の入り口においてはじめて痛切に思い知らされ、今までのアイデンティティではもはや自分を支えきれないという自覚、つまりアイデンティティの危機である、と述べている（岡本,2002）。

49歳以下の群は、このように、中年期危機と思われる体調、環境、意識の変化に突入する年齢に相当することで、身体的精神的健康感が低くなり、よって、回避的受容が高くなっているのではないかと推察される。

竹中は、老年期とは喪失の年代であり、古いそのものが喪失とみなされている、としている。若い年代にとっては喪失体験は新たな創造への出発でもあるが、老年期にはこれまでと違う特有の意味を生じるとし、老性自覚や生きる空間の狭隘化としての身体的喪失、人間関係の喪失、役割立場の喪失、精神的財産の喪失をあげている（竹中,2002）。

老年期に差し掛かった60代は50代に比して、現世を苦境と認識せざるを得ない出来事、例えば、仕事においては退職など大きなライフイベントがあり、そのために社会的役割や立場の喪失、また人間関係では配偶者など身近な人の喪失に出会う機会が増えることが考えられ、さらに身体的衰えなどを日常の生活の中から自覚しはじめる年代であることが、「回避的受容」の高さにつながったのではないかと推察される。

4) 死に対する態度と辞めようと思ったことの有無

「回避的受容」の「7. 死は私にとって別にどうでもいいことだ」と答えた者が、辞めようと思ったことの有る群に多かった。ボランティア活動を辞めようと思うこと自体は、全く自由であるが、死は別にどうでもいいことであると考える傾向と関連があることが示唆された点は、今後の課題として注目に値する。

4-3 自尊感情について

1) 相談員の自尊感情

若本の調査では、中年後期（50歳から65歳）は自尊感情において、有意に高い得点を示したとしており、男性で36.0（SD=5.3）、女性で35.8（SD=6.0）であった（若本,2004）。松岡の調査では、平均得点31.6（SD=7.7）で、23歳から86歳の5つの群には有意差は無いが、中でも得点が最も高いのは55～64歳の群で35.8（SD=6.1）であった（松岡,2006）。

これらの先行研究と比較すると、本研究の対象者の平均は38.0（SD=6.6）と高い。自尊感情が高い人ほど、他者関係が良好であり（菅,1975）、「情緒的安定性」「社会的適応性」「社会的活動性」「主導性」が高い（遠藤,1974）など、さまざまな望ましい特徴と結びつくことが多くの研究で示されている。青木も、自尊感情の高い人は、内的安定度が高く、柔軟性に富み、自己をよく受容し、とらわれを持つことなく他者を受容する、と述べている（青木,2002）が、相談員の自尊感情が高いという結果から、相談において、他者を受容することができ、他者理解へとつながっているのではないかと考えられる。

2) 自尊感情と継続年数

継続年数1年以上5年未満の群が、項目8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」の得点が有意に低かった。項目8は逆転項目であるので、今のままではなく、もっと自分を尊敬できるようになりたいと考えている者が多いという結果である。それは、清水らの言うように、二側面から考えられ（清水ら,2008）、ひとつはさらなる向上心の表れであり、ひとつは自己卑下と見ることができる。この群は相談活動に少し慣れてきて、改めて自分を振り返る時期である。これは相談員を続けていく中でのひとつのプロセスであるとも考えられる。

3) 自尊感情と辞めようと思ったことの有無

辞めようと思ったことのある群は、自尊感情が有意に低く、項目別にみても10項目中6項目において有意に低かった。

相談活動は月平均2.2回であり、個人的に忙しい時には他の月に振り替えるなど柔軟性もある。つまり、辞めようと思うのは、個人の身体的、時間的な要因による問題よりも、精神的な要因が関連する可能性が考えられる。

福田らは自尊感情は仕事満足度および就業継続意向と密接な関連があることを示唆し、仕事満足度が高ければ自尊感情も高くなり、自尊感情の低い者が退職していく可能性が考えられると述べている（福田ら,2001）。すなわち、活動に満足していない者は自尊感情が低く、自尊感情の低い者が辞めていくと考えられる。

4-4 死に対する態度と自尊感情の関連について

自尊感情低群は、「回避的受容」の得点が高く、「10. 生きることについてうんざりして」と、「14. 人生を延ばすことにどんな目的も意味もみつかからない」と考え、「16. この世に期待するものは何もないと思」い、「7. 死は私にとって別にどうでもいいことだ」と答える傾向にあった。このことは、自分自身で自己に対する尊重や価値を認めることができにくい者は、生きることについて消極的であり、「死」をもネガティブな感情で捉えていることを示唆していると考えられる。

また、自尊感情は、「死の恐怖」と「回避的受容」との間に、負の相関関係がみられたことから、自尊感情の低い者ほど死を恐怖の対象として捉える傾向があり、さらに、自尊感情の低い者ほど現世の苦しみから逃れるために死を受け入れようとする傾向があることが示唆された。

5. 結論

本研究では、いのちの電話相談員の死に対する態度と自尊感情について以下のような結論が得られた。

1. 相談員の死に対する態度は、一般の中高年齢者より「死の恐怖」は低く、「中立的受容」が高かった。
2. 「中立的受容」は、継続年数1年未満では低く、それ以降高まるが、5年以上10年未満で低くなり、10年以降でまた高くなるというプロセスをたどっていた。
3. 「回避的受容」は、49歳以下の群と60代の群において高かった。「回避的受容」の「死は私にとって別にどうでもいいことだ」の項目得点は、辞めようと思ったことのある群が高かった。
4. 相談員の自尊感情は一般の中高年齢者より高かったが、項目8「もっと自分を尊敬できるようにになりたい」で、継続年数1年以上5年未満の者が有意に低かった。
5. 活動を辞めようと思ったことのある者は、自尊感情が低かった。
6. 自尊感情と「死の恐怖」、自尊感情と「回避的受容」において、相関関係がみられた。自尊感情が低いものほど、死の恐れが強く、死を現世からの回避のために受容しようとすることが示唆された。

今回の研究では、相談員の心理的側面の実態把握にあたり、宗教性など、信仰の程度の捉えにくい要因については調査ができなかった。そして、辞めようと思ったことの有無が死に対する態度と自尊感情に関連していたことの内容についても言及できなかった。これらは、今後、面接などきめ細かな調査において検討していく必要がある。また、相談員に応募してくる人と、

養成中、認定後の相談員の比較なども、今後の課題のひとつであろう。

引用文献

- 青木光子：(2002) 本学学生のエゴグラムによる性格特性と自尊感情に関する考察、聖園学園短期大学研究紀要、32、pp. 25-37
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治：(1974) Self-esteem の研究、九州大学教育学部紀要、教育心理学部門、18(2)、pp. 53-65
- Eva Schindler-Rainman, Ronald Lippitt (1971): The Volunteer Community: Creative Use of Human Resources, University Associates, California、永井三郎訳、(1979)：ボランティアの世界、YMCA 出版、p. 27
- Gene W. Brockopp: Crisis Intervention and Counseling by Telephone, Charles C Thomas (1973)：清水和子訳、多田治夫監訳 (1982)：危機介入—理論、手続きおよび実際、電話カウンセリングの技法と実際、川島書店、pp. 79-80
- Gesser G, Wong PTP, Reker GT: (1987) Death attitudes across the life-span: The development and validation of the death attitude profile (DAP), 18, Omega, Journal of Death and Dying, pp. 113-128
- 針金まゆみ・河合千恵子・増井幸恵・岩佐一・稲垣宏樹・権藤恭之・小川まどか・鈴木隆雄：(2009) 老年期における死に対する態度尺度 (DAP) 短縮版の信頼性ならびに妥当性、厚生指針、56(1)、pp. 33-38
- 長谷川浩一：(1990) 電話カウンセリングとは、横浜いのちの電話調査研究部 (編)：電話相談の基礎と実際、川島書店、p. 24
- 林幹男：(2009) 「電話による援助」再考、日本いのちの電話連盟 (編)：自殺予防いのちの電話—理論と実際、ほんの森出版、p. 218
- 平井正三郎：(2008) いのちの電話相談員のバーンアウトを規定する諸要因について、電話相談学研究、19(1)、pp. 10-19
- 福田春江・荒川千秋・吉田亨・佐々木かほる・斉藤基・行木真由美・木暮聡子・小野道子・小林秀代・星野悦子・正田美智子：(2001) 看護婦・士の自尊感情についての調査—経験年数、年齢、仕事満足度、就業意向との関連—、群馬保健学紀要、22、pp. 11-16
- 板橋裕子：(1997) 死生観の研究—いのちの電話相談員への質問紙調査と面接を通して—、電話相談学研究、9、pp. 19-27
- James, W. (1892): Psychology. The briefer course, macmillan, London、今田寛訳、(1992)：心理学(上)、岩波文庫、pp. 245-272
- 鹿村眞理子・高橋ゆかり・柴田和恵：(2007) 中高年の死に対する態度—性、年齢、職業による違い—、看護総合、38、pp. 172-174
- 加藤博仁：(2009) 相談員のケア、日本いのちの電話連盟 (編)：自殺予防いのちの電話—理論と実際、ほんの森出版、pp. 132-133
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治：(1996) 老年期における死に対する態度、老年社会科学、17、pp. 107-177
- 金児暁嗣：(1991) 宗教性と死の恐れ、黒岩卓夫 (編)：第2巻宗教学と医療、弘文堂、pp. 175-208
- 倉田真由美：(2008) 女子大学生の死に対する態度と関連因子の検討、立命館人間科学研究、16、pp. 95-104

- 松岡弥玲：(2006) 理想自己の生涯発達一変化の意味と調節過程を考える一、教育心理学研究、54、pp. 45-54
- 森末真理：(2003) あなたと死一非医療従事者の死に対する意識調査一、川崎医療短期大学紀要、18(1)、pp. 64-76
- 岡本祐子：(2002) アイデンティティ生涯発達論の射程、ミネルヴァ書房、pp. 58-62
- Rosenberg, M.: (1965) Society and the adolescent self-image, Princeton Univ. Press
- 砂賀道子・鈴木はるみ・佐藤幸子・澁谷貞子：(2005) 短期大学看護学生における死に対する態度、桐生短期大学紀要、16、pp. 43-48
- 清水和秋・吉田昂平：(2008) Rosenberg 自尊感情尺度のモデル化一wording と項目配置の影響の検討一、関西大学社会学部紀要、39(2)、pp. 69-97
- 菅佐和子：(1975) Self-Esteem と対他者関係に関する一研究一青年期を対象として一、教育心理学研究、23、pp. 224-229
- 菅千索・菅眞佐子・小正浩徳・古井景・菅佐和子：(2007) 対人援助職を目指す学生の適応と情動知能ならびにセルフ・エスティームとの関係(2)一臨床心理士指定大学院で学ぶ大学院生についての検討一、ヒューマン・ケア研究、8、pp. 51-68
- 鈴木真由子・池田智美・岡本正子：(2006) 大学生の死生観と自尊感情、生活文化研究、46、pp. 29-41
- 竹中星郎・星薫：(2002) 老年期の心理と病理、(財)放送大学教育振興会、pp. 45-57
- 田村正勝：(2009) ボランティア論一社会哲学による基礎付け一、田村正勝(編)：ボランティア論一共生の理念と実践一、ミネルヴァ書房、pp. 3-4
- 丹下智香子：(1995) 死生観の展開、名古屋大学教育学部紀要、教育心理学科、42、pp. 149-156
- 若本純子・無藤隆：(2004) 中年期の多次元的自己概念における発達的特徴一自己に対する関心と評価の交互作用という観点から一、教育心理学研究、52、pp. 382-391
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子：(1982) 認知された自己の諸側面の構造、教育心理学研究、30(1)、pp. 64-68